貴 12
881
19

宮城県図書館蔵

松風

巻名 細 弁尼詞ゝ書号を源三十郎乃妻ゝ

ゝもゝと絵合のまゝにも同年ゝ長月事あり 仍絵合

巻同年ゝ春乃ゝゝゝゝゝゝ秋の行ゝゝ乃ゝゝ来

乃詞ゝ聖ゝ見ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝんゝゝの院ゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

孫也乃こたり東院ハ相帝北條氏よりそうゐんの法
也崩御乃時ゆゑ孫なりと称而也遂生氏生よりも氏俗
理乃ゆゑなり
ひんなり北たい尼をあるゝ乃はうこを行用ゝとさてそうゐと
細 岡石こをとまを行へきとも 果されと岡石こハ法華
に宮ふはうつ孫なる也六条院いゐの町とゑめ給とも
山のきこいをもとに望うくはくらを行てうとふくを乃い
まとあ用ゝあ 細 宮を螢ゐとのきめゐるへ
ゆくもゑうきて奚をのめ給しんとはとひもむへさち
まにをてゝゑつゝゑつを給つるゝもるつゝう乃法
ありてこ侮うゐり 果 赤橋を螢ゐ也源乃性ハ二ゐを奚
螢給ゐ乃ゑを思ゑゐ也ゑ給ゐ給ゐめ法んのゐ也
ゑんてんハゐゝゑ給いゐ河ゝ見ゝゑ給

ほやもゝをゐてゐるゝたるほゑつゝひゝをゑとう
せ給つゝあゝゝゑをはをうゝをゝをゝをとをのか
ゐ給へきゐをとゝの給へとゑハ行わゐゐ乃ほゝゝをゝ
ゐに 細 寝度ハ中妻乃居不ゐり源氏来真仁ゐゝ仏さ
ゐやうゐゐてゐやゝをひとゐゐ礼祀曰聘則為妻
本則為妻泥曰聘問也妻之言齊也以礼見問則得
与之敵體妄言接也言得接見於君子不得与之敵
體也とゝつり聘ハん礼速也妻ハ媒介也郢合乃義也
されゝし尝ゝゝを行妻ゝ儀礼の寝度ゝ居せさゐを
河海乃説ゐやゝまゝゐゝ尝ゝハなゝゝり二条院乃ゐの
尉ゝ位給つゝ東院乃寝度とハ源氏乃ほやをゝゝゐみ
ゐゐて給ゐに海うゐを給くゐをさゐゐやうゐをとゝつゐを
細 礼ゐゐゐ河海の説とゐやゝまゝりゐるゝさ説と

[illegible]

[illegible]

[illegible]

落し行常る石井門のうちにあるとかるやうに法師
もろくしうあひぼくんをもちくこあ年法師をとるを
落うく絡　宋　絡とも
思ひて高ち死ちるもはくさりて宿るものやうみてあ
るくを　宋　宿石の母えのこつおてとも
ようひとつてかくこ姉　宋　宿ものをのんへうひくくしても
世中をとていと思てて　細　宋　宿石上のんも　宋　母えの宿る
すりかくる親也
うの仏ものを井に志つこそめくうとも　宋　宿石の者るものをうり
もこ志のせるこひをぬるものてさてちんちくにうやこれを
かうもとるをみそうに　宋　宿石上の原れ葬とこあ絡るも
まるゆれくん中いとくくもとるくあ中記るあるのもを
志門うあるまくこを　宋　東流東墓宿石上と宿

とさてたりをえの頭まあれさやうれくし
き平へきこくをを母えの紅也
あるれはをとるこあとひとる　宋　彼ふ会えのるも
市るくさまのハはをとるさんもとるとくてるのことひと
をこぬくくハはくろもるされもんやとふ　細　造化の料ハ
京へのるくくさとも　宋　要脇ちと四会るとのかもる
ふとうとふ小会宮修理のちとめるるくく
ありるを　細　宿ちも
ひ年はるうもるくくものく絡るも　宋　宿ちれをるも
あやくくさやこにりて作まこはをやうはくろひくくやと
ひ作るを　宋　小会宮のあまてくるとりも下屋とハ雑会れるも
ひ長絡ようり四のあはとのくはくらを絡はを堂ちくてるのわるり
ちんいとあさこうくうるつてるくくめくきこはををうとも

たてまつれるなんはうもといとあることなり　花園会要抄
よりてこれをもつて法堂八棲霞寺にこれをすゑ人倫の
あるべきなり　ゆゑにまたあるべきなり　棲霞
館八宿大日獻云の山房也　換る寺に換也　棲霞寺と云と
乃法源寺也　ある阿弥陀堂也　法源寺八云也
よあるべき也　小野宮右府記永延元年八月十八日法橋上
人位奢然ヲ　法云八　尼　大　号　五　墓　山　大　法源寺　建
立一伽藍置白梅檀釋迦尊像　釋迦八奢然入唐
海　ある仏也　但法源寺と云ハ　苦　ゆ　自
観七年国史　乃　こ　又　書　紀　天　長　法　棲霞
寺　釋迦堂　とあるもつて奢然　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
釋迦堂八　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
云　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

ゑ
ゑ
ゑ

田畠ちとせあきてハやうもとにさひて也
宋 富ちう田畠と伊行のうくるとなるこ
とをなやうくそつ細也その反ハ毎年ハ中務れみこれ
除ちう殺よもつ〳〵ちとも 河 齷 同 塵
細きをもちにつるつ〳〵きうはをとれるとうちわうめつ
宋 貧むく成也はるつ〳〵とハつまるれやまそ宮と中略也
はまをるきをにつくき也 河 強顔 法 納云 枕草子
ひきをうちたる男はさるつ〳〵たるとあり 細 はまをちつ
と略〳〵たる也 幸 同
そちうあれつ〳〵也 河 そちつ〳〵ハ橈 桜 ちひのうるん也
一説そちをそ〳〵細時曲うそをつくも蟠 幸 ちひ
宋 細 神也 細 そちそ〳〵ひるといつ〳〵 孔 幸 同
ちにそのあるとやうれとをなみ〳〵ちうまつ〳〵 細 尼云

乃河也 宋 毎年の河也 家とそ我ハちうまつ〳〵也
そそく年ぢのやうにそひく物をよ 宋 田畠ハ荒れてとく
富ちう仏也とも也
きんちうといちにちうんあまとをとへうあ世中とをもてたる方
みて年ちうもかくもそそつ〳〵ひちつ〳〵ぬと 細 支 澄 乃 物ちう
とハあれとさやうの物みそたちつ〳〵也 宋 寿 ハ文書也
毎年の所りあるやも
うれてとをもとそちつ〳〵そちつ〳〵ちうんちうといつをと 宋 毎
年の田畠乃ちうハちうもちつ〳〵さとハの結へとをも文ちう
とをちりつ〳〵そちつ〳〵あんと約と結しての結をとをりう
しちをそとも
大とのくをそいとかくれハまちつ〳〵て 細 原の清ちうつを
ちをそれまあさ毎よりひるとも 宋 源氏のそひんる

てまつりまゐらせたるなり

そのくちはるとはるくるまをとりてちんつうきはくつまを

宗 要御ちると毎元ちると宿ちう結ゐて大井の宿と

つくるなりとていそくぬへ

うやうよりひうるとんともちると行つてのわ〳〵むことを

ものうりをんとなりとやはし 細 うやうよりあとをへきを見

元宿とて源ハまつり結ハるゆ 宗 源氏ハ毎元ん九

間と大井九宿と修理して結とけ初結つて四石上のか

つまとの結よ物うさとにとひ行とんをこたとの

はんも我国京乃時さん見ゐ〳〵行つあとをこめ〳〵き

やうよりはるう不宜ちるこの御ん也

やうをへひはるう不宜ちるこの御ん也

ゆうを乃ちくはくくを物〳〵結を後のせよんのつひはき

ゐをひをくひとをそんはうきをとやはりあり

宗 へ石孫まて四石の浦みて波〳〵とおひ立結つて坂の

をひとをう行つんとゆうれあををトんよ石よをを石

ゐるんゆ京ちるとまてゐるうち結つせめてゐるう四石

のうをみくわひ立結つ石ちるとに立結てのんはつ

ちるを結んをとつう

はちるとたそくうをちくれををうんをひつてたるやをき

こををををる 細 四石ちうを結の石水出〳〵あるうを

ゆちるう 宗 大井の宿乃ちるをちう〳〵源氏ゆ結とゆ

人よまを〳〵ちんちるをちるをにのを物とゆハ 細 源のんゆ

宗 源氏乃おををものりをものはうやうれすをを思業

〳〵て兎角いひたるうゆをとて大井九宿とをまへをる

みを〳〵会結とゆ可九毎元乃んゆ〳〵とを

四石をつまりをゆとを四結結ちゆ行〳〵ぬんのまへは

とうすもはしりなり　細　人あるひとの云ハ惟光の親長ましの母なる道いけとるくいろいはくまの
なる人なれいつくしてはるへきさま海よりうつくしくいるる
とせさきを結ぶ　ありあらとかわくしてうて　細　惟光とつくり
てんを結也　宗　大井れ宮へはくさまてはやく之の
らをきくれらもつくしてもひたるとハいくの
知ぬとのうをきれハなるへ
海つくにうひあるはうきあるとやゆきハ
細　大井川乃道なれハ海つくるはくゆんて結
しに後はるも　宗　ゆ石のうに仏乃あるとハ惟光
海てや河波へ
さやうれとまるあにうあるとハあぬへしやはを
河　ゆあるとこの也　源乃心也　ゆえの上はやうれのをうる

を法きたるるまし　れへるも　此海をようひある
うるの又ゆ石上乃ふはるも　宗　ゆ石の上海つくに
なれたるへなれハ可知也　宗　ゆ石上はの乃ゆ
多ふあるひとなれハみのうきあると云也とあり
はるをを結ぶ之ハ大元寺れられたにわるるる
河　大元寺事　舊記曰　ひみの親王　淳和后　院嵯皇女　承和七年十二月
入道　依淳和　山崩也　貞観十八年二月廿五日以嵯院為大覚寺
奉淳和大后令為結願院　嵯院為大覚寺
菅家御集　応和四年二月廿三日御記曰　尼大后於第
定法寺列奇　源重信朝臣為大覚寺列當
元　大元寺ハ　嵯院と号せり　嵯天皇　苔日岡放之
地也　細　大元ものの面中ハ栖霞寺とをくるる也　結寺ハ
融乃山荘也

滝とのゝしるしとやとしてもとゝ寺なり

河 滝殿 ゝ古人云舊名沉也 ゝ大寛寺南 ゝ紫明抄

云旧名不全云滝殿 ゝ兵源与聖のゝ人〻はとゝ侍〻

しゝと業古人〻はゝ歌枕を義とゆゝたり

共泉殿と云仙也大寛寺滝殿ゝはとゝらひ物ゝ

と云也詩は滝を乾泉曝泉ゝと作ゝ云 ゝ異名也大

覚寺滝古寺ゝ下多之四条大納云家集云磯の大覚

寺はゝゝうとて見うれ寺ゝゝ作ゝ

滝の書ハ後て久しゝく成ぬれとゝゝて流ゝて行ゝのゝ

後拾遺集 滝殿みて 赤染衛門

見ふ者り今ゝにゝうゝ滝殿を作ゝそゝハ人〻うと者る

あり集云大寛ゝの滝とゝゝ石第流〻ゝれてあとゝ

くちうゝゝと受て乃ゝみゝうゝて赤染ゝとゝゝふゝうゝと

ゝゝ人〻ゝん行ゝと者ゝ

とゝゝとゝゝとゝゝとゝ滝殿ゝゝ作ゝ者ゝ

小倉山 ノニヨスミハアルレマ名ニイロ 黒南屋色大寛寺泉 ミヲオルニヲヲ 蔵枕 ニヲヲ 色

赤小滝のゝ作ゝとのゝく屋ゝ水ゝ新を見て後作ける業武ア

新ゝれハゝゝ化国滝ゝとゝゝゝき滝ゝ者ゝ邪

作ゝ池ゝを泉滝狭 花 滝殿泉殿とゝゝゝとゝゝ大

花寺みを滝殿あり樓殿寺みをゝゝゝゝゝゝゝ

ゝとゝゝとゝゝ白ゝ寺とゝゝゝ 細 滝殿とゝ泉

殿ゝとハ大ゝゝゝみゝゝゝゝゝ

花ハ河ゝゝゝゝゝゝゝ松法ゝ 花 花ハ大井 名イ 里ゝゝゝ

細 小倉宮の法ゝゝゝ尼の家とゝゝゝゝゝゝ寝殿

ゝゝゝゝゝゝゝ

ものとうちたるさまなどのつくり山里のあるそれとかんをたり
　　宗　そさうに作りうれとあるなんも
うちかまつるひるもとまりて日のくれ方　細　惟光よりかんを
　　預て返さを源の殿のうつくしうひつきを給也
たるうきくうくうあるひうくるさうはうりは　光　源氏
　　をれむりへよ源氏のたんをの業と京うりはされたるも　細同
のうれのくてとはやとみにやうへはる浦とうるれるんこと
義子へ方の心はそくて心とうるとうまるんうのとうひうられ
てううりはうれうをへあるとかくんはくしにたりうそう
めうんをりうも　宗　源氏の石とうんも
露つうらねそうひうやはうくはゆかやたうもう
新はむうひみくのうるさいまんを　光　源氏のはゆうるとり
ううねへとうくやまくくうも　細　源の業とうもを給

るゆくくるうとうるや寝るるんをとを光をめて
のんりて　宗　源氏のはゆうるとうとうるも　光
新也　宗　源のはゆうるとにかくくるんへとうくやまくくさと
也年は後の年は後のはうくはうくとうるれ又へ方のとうう
なるうはは源ゆへかるも也のせ中へはるのうるれみはうう
しはへくを光を作うれるうはれうりうひ給也
年は後てをさめてを後のうひはうくるくうくれかるみとう
まくくれとあひうくくまくさんうをされきへくくうは
くれはうは記るこうひはまて　宗　へ方のまを言うと海より入給
へうとくうひくくのうもれは時はうくうひうをうるくくのうり
給うくみをわうまくくさうはるくくうくうんとやうをきと
はんくもとるくくんとのんや也
おうるくくもとのく　へ方のうくうくとに眼光をはんまくくさ

うとたちるまでうかのこるハうたとも哉あれハあるを
ものとそつまれけ遣ハ公奇れ紛ゆてうもるるや未れ自ハ
ん石叶也
さしもかりそめとハかんをなしてを作るへきとてうるを
うのちとをしくさくそもハくうあそれをう 細ものと敬
なしんを回るをとうを
年ハをにかりるいりるをうをもをうはるをうれん
岩石尼のんや年ハをにたをハ尼の中ゆを入尼ハをうう
ゆ〜ゆをハ時ゆ石をてるはさてのかくてをハ完め
ある也 第八尼ハ石の部にてかるや
まくてをまにをうをてをハかをを海ん 河ゆ石入尼と尼
と年ハかりるゆ〜尼をはをうにもをハうれハ雅うかを
もをくゆんとうるや一流雅ゆをうのてう新をもをくむ

尼ハとや 第八通りるを毎天の御をるや
たくかをにうちかるんのかをさをうれるをくをひかをに
細 そをくゆる中さんをうれハうれ〜さ物をとをや 第九
ろゆみゆをくんををにあをハたをるくぬ物をとをや
みをれをうをてあるをハをとハをうをくあくさゆるを 第十
年ん変をれゆるをとの河や
みをれをれをれをれををきをいるれゆをを変をうんや走をしをや
元
をうれ赤ハれをれをるをあををいををれ本をををろ
安藝奇
ををれをれをを走をををむを毒ゆをゆをゆをひをもあひをを水
ををれを磯をれゆるんをるゆ〜
ゆくゆゆををををうゆたるをうを尼つを 細 入尼を敬ををうやをの
をををゆををををををうを 第十一 ゆ石入尼のいををゆをををを
ををををををを

んつうひまてれすとうつう第そのすゝをうれしやも
もゝそゝはうとうさうへさゝそゝうあれと 細 ひさうに
てもゝ帰もうあるようとゝ後へさゝと言ゝに異うをひるす
の出来ぬるようとも 第 ちうる風の間るれとゝ有せうきり
はうひうそんとの海えれんとも
るゝそゝぬいのうをとうさうるとに言ひてちうきくゝしさうる
と俄ようとうるまんとゝはゝそゝ 第 師 流引 言ようあゝに
有うてぬ余ゝかゝれ行れううたるゝ言ゝくゝ言ひとれ
わうさんゝれうつきうゝひうつゝはるゝはうゝまつゝきゝ物うゝん
もゝてうゝまゝゝ海のゝうゝもゝ言ゝゝしうと
ようする波ようゝあ神ぬまうゝちうり秋のうゝ浪ひうれは
ぬうあうれうるとううさぬるあるゝ砂ちゝて 細 わうさんゝ言
海んうくゝのわうるゝとうゝうゝうゝる也ぬんゝ又あのとうると

のうゝや 第 ゆうゝこの女房をやのうりとんゝとうくゝ
つうにとのうゝと後はうゝきゝゝうさゝやうれゝゝみと言う
るゝゝゝとゝへゝゝゝゝのゝゝゝゝゝ
そのゆとある暁よ杜鵑もくゝゝゝゝて 第 はのうりれゝう
暁うう
ゝゝの言ゝもうゝとあゝあゝよ 第 後ゝゝれ行言うれはあゝう
ゝさうゝゝも又は杜鵑うゝゝに出のあゝはやゝて
鳴ゝうるとゝうう
海のうゝれんゝゝゝてゝあゝうに 第 ゆんゝゝうゝゝあも
入道ゝいうゝやうゝとゝあゝうゝあゝて 第 後夜のゝゝうゝひ
うゝあも
ゝれゝゝうゝうゝゝて行ゝうひゝまゝゝゝ 第 ゝく拍ゝゝう
うゝゝうゝゝとゝゝれゝ拍ゝくゝのひうゝゝゝうゝゝゝに

とゝくうけうてきに　はのうりれめてきれ御ゐれいら函
いまゝくさるゆいめさゝもとれあゐ滅ゑひうられとも
ゐる沙ゐるまんゑのゐもてて神ゐうほうに奇ゐもゐること
えさゐとうると　ゐ楚王臣隨侯蛇病愈ゐるゐ　に蛇七す
乃ゑと含て和ゑて思と結もゐる也隨侯ゑゑと結て
楚王ゐ献を和中に常光あゐと結ゐ和光ゑゐ
臭ハ　下和ゑのゐもゐゐ　宋　和光乃ゑとゐゐ
うれ帝王氏行幸にさられゐゑとゐくゐ昼ゐもく
記ゐる級ゐもゐと
みゐれてまゐゐ行ゐるゐゐゐゐ　細　入乃と乃ゐ結也
三業ゐれゐ也
ゆゐしさまてかくゐゐゐゐゐしく思ゐゐ
ゐゐさゐれゐゐてゐゐもくゐゐゐもゐゐんと

宋　いまゐくしさゐゐゐゐる入乃の紀也又八里雲源の紀
とゐゐくしさゐゐゐる　宋　入道乃湘ゐゐさゐ也
ゐゐゐゐ
ゆゐゐれゐゐにいのる別路ゐゐゐゐゐゐゐ
細　うちゐさて西白ゐ也　宋　入乃の奇也　姫ゑ生長乃行也
自然変別ゐれゐ滅ゐ
法ゐを西極をよめゐ滅ゐゐのゐんゐれゐゐゐの
いゐゐゐゆゐしやゐゐゐゐ
宋　入乃乃さ西也　細　いまゐくしやゐ也

尼ゑ
ゐゐゐゐゐ郡ゐゐてきゐゐゐゐゐゐれ中乃乃ゐゐゐゐゐ
宋　尼ゑの方也行ゐゐゐゐ下四の付入乃と乃ゐ安に下しゐ
今ハひゐゐゐ中れ乃ゐゐれゐゐゐれ

石とハ清水のある立石のことなり仮名書中に仮名書のこと
をもちくまよりんとのんなり 細 播磨国の住人なり 関東
無双のひ〳〵と呂と引わりまんるハ織田殿のよ角
とさ〳〵さらあるよ出ひ出るらん〳〵伯とも花る流を
市〳〵つめてせきもれうとこゝ 仮 尼崎中在のあ和と云
流のゆ在〳〵後るれみちにまとみつ也
とてちうさ結ふさ海いてとさもつりまうる花奥うりて
はるもとぬるゝ〳〵月ろほとゝとうへハ 細 源の清ふさ〳〵妙来
とさ〳〵ぬいうれ死あるるゆ〳〵と奥るるとも 仮 尼崎のん
や上ろ羽ハうれかとちあるよ地也
ううれたるととさのこてをてし〳〵せふうるるとうへ〳〵
とうるゆ〳〵やはかさ 宗 都へのりりてもはとうあ〳〵んとのこ
ととうさたる形とハうりうれも結〳〵る世よ海るも

ちうれさとの尼崎ろんや
つさてみあひんるとうひるそう陽とさ〳〵ぬせとハたのまん
細 とりろ世るみ逢ろんと陽とさ〳〵さるも 宗 ゆんとハ氏ろも
入石よあひんうととうとうひく陽るれせとさ海
うやも
とうるとにさふとせちうよの結てとかさ〳〵につきてこ結るま
〳〵きう〳〵とうひつさはうにみちの海ととハとう〳〵ろあ〳〵ろ
さう〳〵なるり 宗 ゆん入石とと送るとるとさうそひ〳〵ぬへ
〳〵 細 又とつさちひ結や 宗 ゆ石上の又入石よ送ろ結へ
との結へと是深ちるとの海うすハ〳〵やうひのうま作へ
ともさすにろの結とも〳〵ん〳〵もとうけちるゆや
世中と結ろ〳〵めに〳〵ろ所へのくみてこびてう結〳〵るゆとた
天のほりうとめとこつやうにあもをうれの結〳〵つさとんてようる

細やうすやとこゝ行へくもつゝうと方れはさまるとあるさま
のおりひまゝ〳〵るるるおほうしうそ　元　をるるといはれ
入ゐゐ方り経行るるやも我方せとこゝ様たりしゆ播戸
ちるふ物くゝう後をるるとせゝるこゝ品女元独のことと
こゝをゝ〳〵ゐやも但とゝて〳〵部へのゆゝんとこゝひ行〳〵うと
をゐる文行ゐまこゝめるるとこゝひみてハ行やゝ大ゐれるき
改ゝとゝうゝめんるゆゝとこゝひゝくせゝと様んゝるゝれゝと
てやこゝ行〳〵にこゝうをめるゐれるゆうゝてきゐるゝゐる
ゐくゝと経り行やも　細　代ゝ下入ゐれ羽やゆゐるとをゝて
播戸の但ゝ物て行ゐる物ゐわりむをめゝとゝう〳〵はくゝた
ゝゐゝとゝこゝひゝく但ゝ部ゝ様ゐ　第四石ゝに文入ゐの
経須やゝ様たるせゐれれゝゐ方生ゝ道行へをいりやゝゐゐ
ゝゝうゝきゝたゝんゝうゝをめゝに文ハゝ大ゐの家ゐれゐゐゐ文行ゐ

物て播戸へ下〳〵そゝやゝきれゝ我方はゝきゐれゐゐに国
のゝゝゝゝとゝゐちひ〳〵ゝゝゐるゝゝと物ゐれゝゝ文部ゝゐのゐゝ
むゝとゝゝゝとゝゝゝゆゝりてゐるれ文行の我ゝゝゝゝゝ主
つゐるゝゝゝひゝゝくゝゝゝんゝゝは様ゝゝゐれハ経りてて
ものゝゝゝゝゝゝハせゝとゝゝむゝくゝゐれゝゝてゝとゝひ善知鳥
識よゝゝゝて代浦ゝゝゝゝひゐゝゝるゝゝゝ
ゝゝふ物ゝゝゝゝゝゝ

しと 細 又大臣くらゐをとゞめも

そのくらゐにつきてハうゝ思とゝまりて侍りと云ひ給るに

細 うの御そうくゝとゝまりたるとゝひ〳〵せとゝうもくゝ

ハゝあるとゝうゝとゝのもたゝ御と思ひつるみとも

宋 のやうくゝとゝまるひ給ひ御ものくゝにそくてハ

ゝるとゝうゝ行〳〵させうゝみて 細 御石上れ御とゝまひ行と

乃て八部よあ〳〵八可絶宮ばうくゝとゝもさをなるくき

御とゝ行ひくゝ 宋 御石上の御とゝまるく成給

よつきて内てうやうれ南みてくゝつきたてん給ふもも

みゝきとくゝしきこゆゝんとんのやゝこゝれまゝくゝあけき

ゝくゝ給ゝまゝに 光 御石上の御とゝれ乃るとゝ乃くゝ田舎に

ほゝもんを入給のくゝるやゝれ御乃殿とゝひ給るやゝ乃

やゝハくゝるとゝつ乃くゝとゝうゝ 細 御の殿乃ゝ

宋 唐ゝ業賞給とて天下ゝ乃及ぶれ文ゝあゝうゝ思

やう侍ゝて御ゝ侍りて我文ゝ給ゝ威給のみゝるゝと乃ゝを給と

やゝやゝうにゝのきれゝ殿とゝきてゝるゆくゝとくゝとゝ

伝神とゝそのゝゝゝゝて内乃ゝゝもゝうゝはゝゝゝれ乃ゝゝゝゝて

ゝゝ乃ゝ乃ゝゝゝゝ

ちとくさ毎ちけくるるる

火ハとかるく無のんとうるもと彼人のうるハ
天へとのうる狂乃人てて我人てを伝ると也正法令
経云天人欲退時心生大苦怪地獄餓鬼畜生十六分乃至又云
果報尽還墮三途 宋 天人ハ天上の楽尽て三途
に墮ると也宮殿ハ人乃ちるはまれたると三途に墮
もる乃成〳〵一時ちるあけ〳〵てとハ四石のうしにある
間をといつもちるへ〳〵
とうちるくいけ迷をうぬ 宋 四石浦に教年寿〳〵三途の
乃をとをふ乃一時ハ〳〵ちるけ〳〵へあるくてのるくや也
命つきぬとをこ〳〵めすこと 細 伝ちる夜の長さやつ長
うるを云河あるを中乃間を夜八伝河名業をすり
ありを流れハ可略之聚乃同
後のをとをあ河〳〵ちるむあ 宋 入乃命はるるやを中陰

ちるとを云河中云ぬへ〳〵
乃〳〵ぬ別ちるけんこう〳〵ちるを 宋 ちうをれ別ちをそれ
みを張行ちるを也
世中に乃〳〵ぬうるれ乃ちくまれるをもとのうるへ乃てのたの
いひをちるれ乃〳〵をうるとをちるへんくをとハわうをの乃ちるを
ちるむ伝河乃はをめみをちるはんをををちるくうちまを伝あへ
きをて 宋 をちるけ乃〳〵をうををを
こうをにそうち乃をそをぬる伝車ハあまをはくををんをををせく
乃をそをある 宋 ちるくさ海也 家まて八分上四石上をう
入乃うを和〳〵ちるとを乃 乃 あひのるるを也
和〳〵うををんをとをて〳〵をとて
伝をものへををあるうちにかくろへ也れて舟みて也ひ
やうみをとををめたうをひ乃ちををるあるをて〳〵伝

[illegible]

[illegible]

[illegible]

さたる紀さうの杜とハ南時ちれハうあるも　細うの紀ハ
ハさと舟と同心也舟うるをハ行うさたるんあり　ハ紀
ハ舟ろんさうこうの紀あるんるるんしの海う稜ゝ作う西行
おもかうろうの風うて　細　作用也
ろさうとあるの日さうこうハいるをあるんるるんうめうまれ
んをあれも　宗祇石清水と出てうの京へのうんとのはと
さうこうの作も京ハこうんるれハそれ風みてもうくとやり稜也
みちのほとうこうこうにたるゝたり　宗祇石上ハ高車
ゆへ〳〵行作京のうこと也
家のさ海とはゝうこうて　細　大井れ家也　宗同
年ハへはる海つゝにはほこれハこうれハこうをたる心うこと
せハ　細　西日さ山橋こうこと
ゆゝれとこひはゝまてあられるるはうる

宗　毋天乃ん也　祖父の旧跡ちるあも
はくはとそへさるらうるとゆへあるさ海すあのうれもお
うこうたるゝたりまさ海やうれるにはあゝねとすゝ
つうはちくもあぬへゝ　宗　惟光とはうゝあはる化
うをたるも
そうこさあつゝにはほをうく　細　原の家月也
はまうをうのせさをうあり　宗祇石上のうをつうを結
うゝせ榜のうとまて作付ゝまあるも
わうをうんるハ　細　原也
せうあはゝうこうはほとにはあも　宗祇石上のうと人
原うるうと作ゝんゝて紫上の系あとうれ作ゝとに
うまにあうをはほとも
牛くはうひつまゝまて　宗祇石上のんも

もてこ家あるもあるこうはまつうるれハ　宗　四石の器遠
乃宿れるの
うのはうこうんのうこんとうきあ〜ひれりとれ〜こ〜う四つひう
あるれもこんうるれこるるれこるるかてにうちるもてゝとこ〜ひく
可れ風こ〜たるく記こきあひたり尼元ものうる〜
をすてこうるとう行つる　元　四石の家あるみて源れ浦形
乃ものこんを引るし〜こ〜とと思四て人の宮まる〜
こるれるれハもこ〜こ〜こ〜こ

よみ侍へ

くやうに物をとられなとあつらへ給はすとく申くしたしみ給
はれさるれいの人目をもとをしたまうるとあつ給ひてとらす給
ひしと女さうこにはかくらんとうらうにたまはり給ひて
はりをるをきいろさうくるやはのまを給ひてさうこ雪
を給ひ　女えんはかくらんと　細殿の石上の菖蒲のもり給
るをと紫上をきたりうにはやきうを給はれるを
うくるをへさうをの給ひて　栄　暗殿を雲をて給をた
やうをうくとの給ひやは桂院をと修理のつかさ
しとをんを　宋殿の石上に法師のうをつをて源氏のうをつをて
紫上をの給ひ
いさやみをもわくてはとをに者を　宋ををををを給
発角西門し給をも

ををうくんとをひくくをのわるをとをくきあてまいるれい
ふくるくをてをんさをのくををうををををををを紀の
はをををくををををををれい三百八十ばかりをんと中をくを給
桂院をいをををををを

細 桂殿と大井とをひとつにすりかなる物也

四つさるきれとのくえ所へわくこゝろ為ゆへ人はとやまち

と云すとんゆりぬはきゝきるり 宋 はきさる花とゝ紫上

のうちをきゝ給しぬさ角也 四つ人はくゝ人源氏わ

ゝ給てゝくゝるをいゝをきゝ給さん殿とに紫上乃給をる

らんとのるゝとおのくえ乃くはるゝをゝいてゝあくゝを

めゝ給てんといゝるぬも

古 はゝかゝくゝをゝとあくゝ給をの文氏者し而を思うり者る

とのくえは者ゝをみゝもゝをゝうん紀世中にゝつくゝをゝれ

細 紫上の詞也 源ゝ二日三日みゝをうゝ給ちんとあるゝ也者

ゝり 河 晋乃主質ゝ乃宮山ゝるゝて一局れ碁みるゝ

ゝとゝに斧柯の者ゝをゝりしるゝをゝりゝとゝんゝをゝ海ゝ

第勅のゝくゝうるゝくゝさんゝをゝゝ者略ゝく

思いのゝくゝるゝくゝをゝ海ゝんゝれ 乃 源のんゝと紫乃四と同ゝ

ゝゝぬゝゝゝみゝくゝるゝくゝをゝゝあくゝゝうゝひゝみゝくゝをゝゝうゝれんゝゝる

元 流ゝゝ 細 同 平 源大井へ日ゝゝゝと給御ゝをゝ上のゝゝゝ

ぬゝをんゝくゝ源のゝ給詞也 宋 源氏のゝはんゝゝ海四とゝ八紫

上れゝゝゝも常に源氏のゝ給ゝゝとゝに者ゝゝを給ゝ

同ゝゝ給ゝぬゝゝも 元 ゝは詞ハし女者ゝゝゝあゝり紫上我は

ぬゝゝゝのゝはゝゝをゝんゝゝゝ

我こそなるとのんとうつ
ひしてけるとおぬそそう
ぬるうとそれをまもりて
はんつる

うちゐてある　細　姫君也

はるかへさるもしかくちゐひまはりて月はの法師ちかとな
きて雲ゆるをと義はる塩屋けうこにもとくしつくんと
を塩屋の法師みてをいとはしもれまてをくんともろく
らくを　栄　めのとうるをとうめる所をれ事也

行方の思いあるをるうろひ弱へとの弱へを　細　二条殿の系
ちう　栄　的石をを東洲へわくく行くんとの行也

いてうわくしき程るてとを雲ゆるをとりるをちう程ひ
と程ろ弱のは雲ろくくひあく弱　細　あくれをの須也

はくろへさをろあつるをとをくろへあるきいくちをにはは
せくる　栄　大井の宿乃るを也

桂院は海ろ行へくを雲をれいちろをれくくろうろ
あへまるをろ雲ちるを皆是雲まくろ雲ちるを　栄　桂院へ来た

るくくを大井へ是ろうある也　栄　前を紫ろくを大井
宿へをハ不被行桂院へは来あくんとの弱へをはさをれ
くをを桂院は是来ろ不に大井は宿よまくまは雲
雲を過をに又それへ来加へ
前紙をの行をあ行をるをはくろをを弱ちくうこれ
をて石をもくみあまろををるをあをけあるをて去
ちをさを　栄　大井の里乃るを
行くくるをへきをれ　栄　大井は宿乃るををろ
ろ所をををはくろををあひるををををちう　元　むし
まをあ所ををて石ををくろをるををを苦の而
新をを死被をれをはひをををををろう　細　源の河
ろをめををひくくをを必ずをんの乃ある紙也を
こに行をををれは立をくくあるくは所くをまるわを也雲石を

てをやるとあるとにんのとまるを待つとも　笑あひるをを
をあらをさるをやそのゆくをくゝとゆくゝろひてをつゐる
ありをそねハ又立出るゆゑんとまりて名跡あるとのんも
ちてるゝをゝて初て立とにゐるゝとまるゝしうき
ると　河をのゝをやを玄紙をゝ有ゝゝをもゝををを
のゝをゝは　をてるゝをゝて初をやゝ第立石をを
あを積ゝあるゝとんをゝをゝてはゝろひぬをハ立河
名跡打ゝく物うをゝあゝゆへをとあるやゝろゝうう
をやをゝあゝれゝまゝをゝをゝをゝあゝを
をゝるゝや　花山一條乃ゝ河邊をゝ得ゝゝ物やゝ海よ
立河をを立石をつくゝろゝ砂ゝんをゝを待ゝいゝゝやをを
待ゝ笑ハ左ゝ源氏の海系れ河ゝゝ待ゝ待ゝやをて
をゝ物石のゝまやゝをゝくゝ待をゝをあゝねをゝひを

立ゝゝゝゝ名跡ゝくゝんゝとゝまゝゝハ若ゝゝゝゝとゝゝゝゝゝの
ゝゝゝと女をに源氏ゝをゝゝ　幷源氏ゝをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝとゝ立ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あるべきものとのあるべきものとの給へりしかば尼君とうちうち
ものの給へりしかば尼君とうちうち
いとゝものをのたまひやとて　第　前の詞
うちさとうちをいるる紙をとりけるをもとも紙を小袖
白袷成とも
はるとしめいてゝ　細　れうれさ成也
末丁ものとよりの給へる　第　尼君のの給へる也
はゝきろくあ（ヤイニ）ゝたて給へるを法師ちのひの
とはれすゝそなひのゝ　細　ひの君とう頼
ものとるよりも　第　姫君とやうに可給ゝたて給
るを尼君のとひのとひ給と源氏の慶義しの詞也
いとゝくとひとあゝ給へる法師ゝとゝとてあうさせ
ろう給へるゝ　第　四の浦みゝれとゝう

のゝのゝろ迷と給て寝ようの給法師ゝ
とも　先ハ接（アイサツ）の詞也
まゝうゝに寝ゝにまゝるまゝて思ゝとゝを給へゝんとさ
ゝくゝにゝんとゝとゝるゝゝの給　第　四の君人のゝるゝ給
給ゝまゝるゝゝの給也　接接也
給ゝて給ゝ世ゝとゝゝゝに給ゝたゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ世給ゝれハ　細　尼君の詞也　第　右衛門の源の君の詞
給ゝ蔵人ゝゝあるゝの詞也
命ゝるゝゝのゝゝるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
細　移んごろよの給ゝるゝとゝゝ
ゝゝゝ給ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

のこゝにまゐりあひてとを三条の杉とも
みさこのるあゝ磯波よ袖なぬれそ濡たゝめ彼ろかゝるひろを
あさきねさゝゆゝやゝ少うくゝはくさを伝ふるとゆメ
ゆるあそひうゝあゝねて 細 浮舟ゝと畢下此詞也
芸物語よりこのもゝ語なる 畢 中務宮の語られハう
ゝるをを物語り給ひ尼云の流さ初さゝあゝ
と畢下の詞をとるゝさめんみて彼歌を此のをの語
ゝり物やく 細 中務宮の語られハうれるをを語ひ
語也尼云の畢下ゝるゝ紙さやうのゝ云を詞をとゝゝ
もゝてゝ小舟乃歌の語るゝ也ゝ此詞ゝて尼
云乃文ゝ中書とゝ云るをあゝゝれ侍也 蹤性 のたゝに
あハ玉橋ゝて少ゝ侍也 哀深 儀物乃詞也
ありさ海をゝゝゝゝ世語に

光 無明釈

白天延三年八月十三日亀山より行幸あり 後の世まで
ても小舟山乃ゝを 紙合 の中にそ此の詞有ゝ或
流りゝるゝ侍り
はゝゝゝれゝるゝ此ゝとゝ
かゝとゝゝまゝゝゝとゝゝゝゝ

あのこゝろをもて苦行をけまてるゆへ　宗　尼公はしてゐ人
ゆへ宿をたいれとも　河　あはれ　細　ゆたかなる法師也
わさとはらくあいひ者いさ　宗　尼公乃さ海ゆ　河　ふよ　細　ゆ法師
いさゝか井をもやくれとも　宗　ゆ　河　ゆ　細　ゆ
いさゝか井を小井やとゝ　宗　ゆ　河　ゆ　細　ゆ
中二ゐとうをたり　宗　源氏ゆ　河　ゆ　細　ゆ
さるゆ水やとやく八苦也　尼公の手法氏宿ゆ
行ゆてゆゝとゆ源ゆ　河　小イサライ　日本紀
しては源ゆ　河　ゆ
義とうちゆめて　河　ゆ
　河　ゆ
　細　ゆ
　細　ゆ

ゆひ生ゆ　宗　源の義とゆめて　河　ゆ　細　ゆ
ゆゝゝにゆゝゆて行て　宗　源氏遣官　河　ゆ　細　ゆ
　宗　ゆ
　宗　ゆ
　宗

法華経をあり[illegible]ける[illegible]
[illegible]
心安く[illegible]
[illegible]
[illegible]

や宮こうちあるをみけるあるこゝろあるこゝろ　花　ひさかたの
きるを　細　源の宣旨うけてこゝろ
や花流水　源と言ちかうこうちあるもみをる
こゝろやうよりてたるをとるをちかりとも
分よりあまりとあるありさまあれとちらんれう移ひまさき
つとにあるこゝちをとひ　花　播磨の国にいつくしも
あらぬ所なる宿借といつる　細　ゆかしも
えあるもかりもつまこう　宗　ゆかしも　初ひさかりそ風
こゝちを源氏のえをて結まこさとも
わつ来ることはをとひまわこゝ連結　宗　姫元のもも
こゝろみせまこ　細　源のうんるもり
ゆこゝろへたるさ海みこゝあひをてんをむこるこゝうにわこゝさと
宗　大井の宿すて淀ともるこゝてうこゝてんうこるれとも

二条院よりこゝあ心のゆくこゝろとをてなるさん　細　紫上
心の養ひこゝ結へきこゝろとあはさとも
後のたはをつこゝもあなれるんこゝとあるこゝとと
宗　右ちとにをそんを時宜可御とも
みあるもこんこゝとわこゝを　細　ゆかしこれあるこゝん所こゝ
宗　ゆかしこの姫元をこゝあまこんこゝいとわこゝきとも
えこゝちこて結こて後こをてこん結　宗　えんあはを出さぬとも
わこゝさるこゝこゝにもこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝもをてあつひこゝこゝるもこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
ひまはこゝてこゝけこゝ　あこゝるこゝ　細　姫元も初はあるもこゝ
ひこゝ結こゝを源氏をこれ結こゝ
てこゝこゝてあこゝもこゝるこゝ海乃こゝるこゝこゝひあるもてをこゝくせこゝこゝる
こゝ乃こゝこゝこゝ　宗　ゆかしこの所こゝこゝるこゝ

まさうの日八幡へうゑてまゐる殿へ八まきとうほとのまゐる
ゑてあやうて　宋中一日乃遐爲たまへ
きうまいて殿へまゐる紙うつ殿ほとけ
ひて　宋大弁殿富うまゐる家へ殿殿へまゐる
うくまゐる殿へ八わまくさるうりたる　宋　極院へ入てまゐり
殿へまうる殿中に大弁富まうて法もうひまうり殿ともも
法さうそくうるまゐ殿て　宋　源氏法殿あくんとそのさ殿も
いとうまゐまうる殿わさうれかくかんあくまゐるへさうまに
もあくぬとて　宋　源氏殿へ入をまの殿殿也大弁殿
富乃西ひあるおくとかんあくうたるとも
さまうくまに殿まうて殿て殿　宋　法遠とともにひうまうていて
殿也
殿殿へうまうれまうるとまうくまゐまうて殿まうまうまうまう

殿へうる殿へうまうれまうるとまうくまゐまうて殿まうまうまうまう
源氏殿へまうまうまうまうまうまうまうまうまうまうまうまうまう
ひ殿さ殿也
乃て殿いまうまうまうまうまうへさまうて　宋　乃へくれて乃字まうし
殿へ殿殿まうて殿へまうまうまうまうまうまうまうまうまう
いまうまうまうまうれまうまうへさま　宋　代日殿殿殿殿まうまう
くに乃乃殿へ殿一日殿乃殿殿まうまうまうまうまうまうまう
つまうまうまう殿也
いまうさまうまうまうまうの殿へ殿　宋　乃へくくハいまうまうまうまう
乃殿殿へくまうへさまうまうまうまうまうまうまうまう
乃乃家殿殿殿殿

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ひ給ふるへ〜
やそうとうつ月給へるに 第 源の法橋とたうハ也
さこそたのめ法師月とくるまを少の也 細 前ハうそ月とせ
ちうしとうも 孝 物石上乃ふるよ雲出さうしうの
第 物石上の布乃河みそたつくるまいさる出給とそいへと
をさすうみ給わ〜さに月医う給とも也
いそんうさるたちうるれたかつちうり 第 源の法橋と
物石上の月給てのんや
うそうそひやさ給へ〜うもそうあ給よりう給
り者ハたそうを 第 源の法橋そ物とそうそ月やうり
物石みそ八月給〜うて八成あひ給てさ〜ぬされを
そまてあまめ〜さとも也あるうちたる物石上の月也
かくてそものくしうるとうれとはさ〜ぬされたそまてあ

まめ〜うあひ給のううれわるそあれうちたる月医
ある人き 細 源氏乃宮仕のうちあひうるとうり 第 解官
かのうそとそうり〜医人をうるあるとうり 第
せ〜まて〜医人のうもうをたりしとそたち遷の財物
給〜てはれをう〜まて〜ものうう〜こ後京〜てをと
のう〜く宮と成うりてあるし〜ハたまつ財うる五位乃
医人り物うとのうもとうるあるとうそとはうう葵
生たは撰乃財うれ陪乃ハ成たうハも孔仕うう事也
細 賀茂のみい〜き漢うるる医人也 孝 右近衛うて賀
茂乃うう〜さう〜月〜ハも
ゆをいのせうみうくたとう〜ハうう
そもあ物ちうをみて 孝 たそ遷つ財うるとう五位ハ物うる也
清そう〜うるとにうりさうる 第 五位医人う源乃清夫

刀をとりにうるも
人影を刀につきてうつるされはまつ〜ゆるねとうこと
なれハえうこそ　年ゆきいそ〜れ須也るすの〜るるること
なれとを者てやうこ〜やうきへうるも　細　うちれへ
影をうつきても　栄　義人の女房をとりつきてを納
やはうんすてうるすこと見まつはきゆるねとおそれられ
そこそこうへねとやはみ位義へとは海花るすこと
良清うこくの給へうれゆへそれるはんよる橋ナ
ちるすて国よ〜附良清うとうきへ〜みゆるて
と女房のちとくしさ横〜給へも家すてみ房
きりわひくきしきむさ後ゆれ面きられも去
とて八宿を成ううあるん良清うとしあ〜さるも
うゆ給へうゆる曉の極をとおとうう〜ゆ〜さすへき

ようをうこにちくてやをうこ〜きうもを　細　ゆるすの者〜附乃
るすとを謝（カシヲレ）ナへうさとうれ役をちたとて品をのと役
一　よをへきさこうるも　栄　浦風と八ゆるうそうるやね
えへ京てやうやうれわ言をえおとううさあるのんも
八をうの山をうこに落くれすとおとへうさうあると
花　えへ女房乃面をもへ八をうれ山をナ弁の里れ山へをる
るんやはの位居を被ゆるの落くれすおとへうさうを
おをえへるすとはうへしるとうるに若を見あへのあ
ゆうをあのるへをれとうも　細　里れ八をうれやはナ弁
をへ影ちくてゆるの落くをうこ文すおとへうはる也
栄　はゆ八女房をう義へよ面をるも大弁の里八やれ
八をうへうれるれをへしへさをゆるの乃落くれる
とをうをねうとのんも

杉を苔れとそこそこれつるに　乃杉とぞ　ひたぶるに　雅とうと　知人よさんそ　細　苔の面を　伝ふ

に苔ふぬ人のことハ角のことく伝ふ也　宋　大井の女房をうぬくしさに雅とうと知人ゆさんと

ふ所ふる義人のやうなの絵ハ色のゆゑさとも

ふまぬ人を物ゆひ伝ひ　河　伊勢物語　ふとふ　ふぬ人ハ世ふもあしとのうさ面く年ふるぬれハ

ふこれゆや我をふひふ所ふすをあゆさふゆとふ儀ま

ゆうゆ面ゆ　年　こよふ

ふ物ひふ所ふすをふ所ふゆやとハふくさふるゆ我

我を宿とふゆやゆ原の絵ふゆふてのゆ流ふふ

とふあふゆを物ひふ面ふにあふをてゆ我ふひとふひ

ふ出ふやのんゆや歩ふ所　伊与ふ　ふ河ゆ義ふ宗不審

紀伊守書と良清ゆふ何良清ハ備ふふふ良

清ふ物ふふふ物ひふ所ふすをあゆさふゆふ

ふふとふて良清ふふ義ふ不面ふ宗ハゆをいの

所ふ流ゆ　細　ふのゆゆふ我ふをゆふふすて流ふふハ面絵

ゆふとふを絵ふゆて物ふふふふゆやさふふゆ石ふふ彼

ふふふて物ふふて伝へふふとふひふふ思ふ面ふふふゆ

宗ニ　良清ふふ出何　孤　付　河　良清ふふふ伝ふふふふふふ

ふふゆふふふふふ不審ゆふふふふふふふふ河ハゆを

いのふふふ河ふふ面ふ宗変ふゆ　宋　宗ハ義人ふふ貴を

ふふ河ゆふ家の八ふふふふふふの流ふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

とのゐも我とはゐんすてうこゝろとつれとちかり
ゆきさらぬとも人あり　第　ゆきもうやハ高ゐんすてのり
とうるゐや　光　光ハ又良清うんもちうるゝやハ万うれ
ゆきうりて代せるゝ　ぬやうや入乃のゐとて我と言ハ
とうをさらぬとゝへし流まゝ　光　たり今ゝとさ
らゐと云るとハ良清うゐ房よ云詞也
とゐとさゝにとうちをゐやうてゐうぬ　第　為人ゝ
ちうをゐるさ海也
ゝとよそはゝくさゝあゐゐうかと　第　源氏ちうれ
さ海也ゐとゝくさ神ゐや
うゐまゝうとひさゝ　ゐて中車のちうに
第　清車ハさゝとゐをつゝゐや
ゐ中ゐ光東書のを給　光　氏三人ハ系為ゐちれんや

羽
淮とゐるゝ　細　系為ゐるゐゝ　第　為ゐ中ハ遠り天
井宿とまゐるんや
ゝとゐくゝしさゐくゐ月ゐうゝとされぬるゝそぬゝと
細　源乃羽
ゝうゝうゝゐと給　第　源氏ゝうしにゐひ給との詞也
ゐんゐ月ゐハ行ゝう清ゐるゐにとく迷給ゐゐるとゐ給てゝれ
ゝうゝゐゐさゐゐとゐて為ゐ給ゐる　細　中遠の人乃詞也
山の孫ハまゝゝゐ色給ゐるゐ聖人の色ゝゝゐ中ゐ給ゐれ
細　為ゐのゐて為乃ゐさゝゝゐゝゐ山の孫れとれゐ乃ゐる
氏ゐゝゐとゐ為とゐゐゐ中ゐ
ゐふゝれ親ゐのゐさゐにゝゝひ立とく迷給ゐるゐゝぬ
らんゐとゝゐ　第　ゐんちやゐうゐれ親ゐどゐんゐ淮ゐゐゐ
をゐ氏ゐゝゐ為ゐとゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ

采 楓流のうも

みちうれるはあるべきさまなく 仍 郷会のうも 餓のみも

還郷会 采 仍ろうまてるとうるへ

うつひとともめ〜そうるにあるものさへはるとあ仍いそうる

野ありとまりうぬる采たち 孤 をあすてのうる 采あ〜

ゝての海士れさへはうはひ出るも

ふるもるゝたうるも 采 行仍くゝるれんも

引きつきたるを行るを藤乃うるとはとにゝてうられと

采 又八唐菊菌の枝のうもはるるも 仍 ふる付枝うる枝

九と羽乃下をうさうて山をもをみハはそうさうゝよ

て付るも三はゝにあるうあるをゆゝうもをあるもて

きを山つとゝうも藤うゝもを藤唐菊枝みも

はくるも 四 寿 エンキ サ年十月十八日 石 ヒカリ 雅 タ 楽寮人 リョウ 枝法源

原 ニ 奏 ソウ 舞 ブ 枝 中 推把 ヒカ 右大臣 仲平 紙 言 ゲン 家 京 朝 臣 着 小 ル 枝 菊 枝 立 陽

第 ニ 奏 ソウ 云 船 来 氏 有 雅 進 ル 物 贄 ヒエ 宮 ニ 宮 治 宮 義 日 託 永 観

年中 朱 雀 院 へ 奏 ル ふる 義 の 枝 一 もちに 雲 雀 ヒバリ を

ゝ尾 ゝて 鳥 ヒ と ゝ ゝて ゝ ゝ 付 ゝ と 見 ゝ ゝ 西

園 法 師 ゝ 枝 ゝ ゝ ゝ

と多くあるとうひあるを西京仁義法せさうとあるう後
よ校さ〜のるあさうかけれたゝ云也あと〜て歟ゑる
行ちあとれて強令ゑよ改と臨〜あるとさく業さく
あ人間答於理不盡ゑやあ〜てなれ校ち〜とうゑ
義定りあ人〜さとさに於なれ校と作ちる唐人
の待多し行形校ちと十日蘭ゑを作ちうち例不
可稼計而西園寺と雖せさ服あゑ校あるなよさ云
実海荻義落ちと八巌さに校ちれ物也仍荻の校
落の校とうゑ係他例やあるふこゝさうゑ理ゑ人さ
元荻のあうえをうさとてあるゑ係くいを校り
作をたるたうこゝ事仁れ秘抜ありうく 幸ゑる義
ちとに付ちも

あ作みさあまうくひとんなうこれて 第沙盃ちひくまい

ゑることとをとんちるうれとも
作乃ちうとあやうをちれと 幸 辭牛に岸とれ人くこの
事也
ゑへよまうくれあれ行〜まう〜くくしけとの〜後白ちと
はくちわ〜あ作花やうに乃〜出る作とに 細 あやうき
とを三ちうも
行作とあうそひち〜まうとてうとあううき 幸 沙盃也
初さ拍ひそうとんちうち帝とゑ上をれうさうさ〜て行り
ゑあひあるてうし供をうるかと川抜吹あうをてあ〜
ろうさに作ちうさ〜あうをようろうろうとをとある抜乃やく
ゑくる作とに蔵ゑ人四ゑ人をうとはをてうちまうとうへり
作ゑ〜ひあるを法作ちゑあり付るはいぞに 初さあひて
ゑとんちうと 第その外八略〜てゑさ〜ゑあさ慶

をみて古のはなつとあくはるてかるこはるうら行へきとい
うるれてとあはせ〳〵きこゑれハこゝにうこゑをきこゑのよ
ゝるゝ〳〵こゝゝゝてはせてうこゑをあるりけると 河 嘉文
云古日拾遺の中に拾遺ハ文日古日遺
もるゆゑこゝ 弁さして行るゆとゝくことを古日ちとつく
さゝるるゆや 細 家の酒のうをるゆ法花経さして行
るゆゑたちて古日ちとはきあるゆへ〳〵こゝを本
ハきみとあるゆ 宋 天文の法相ゆ
侍従仙人の弁ちう者ゆと 細 長上人四人ちうとゝ云
うち故へ〳〵ゆる仙人弁とて路中おの弟子〳〵そ
きみをあ〳〵を非とゝちゆ
月のをもむ川乃とちる里ちれうれをハのををうる
伝 安天論云桂花月〻中仙人桂樹其初出仙人疋見泝

成形桂樹生兼名苑云月中有河〻水上有桂樹
高五百丈 細 ゝ〳〵の月をを流て面〳〵ゝ
宋 桂の里ゝて月ゝ月ゝるれをゝるれをゝゝ
月のゝをゝゝゝゝ
ゝ〳〵やをゝゝゝゝ

とてもまうもの物とうちつけてさるとられぬべきなり
とあるまうもをつかやとゝひつゝ・たりうるもの人へあり
ものまうもうひくくつゝきそうり　元　能物ハ被物（カツケモノ）なるとのゝ
めのれ裳束と思えせるゝも　細　うつを物引ぬるとも
　宋　勅使ノ祿ヲ給フンとのゝも
うぬ物つかさけみてあること　宋　裳束乃入あるこひ
川二ゝあるや
清使乃年ゝをくゝ海ノ系ニ女のたうそくうつを給フ
　宋　源氏ノうをされる系図也女乃裳束とハ袿ノうちぬ
あるへし
ゝのうにたれのにて物ゝ考ゝとぬ山さと
　細　我方れ巡宋ノうちハ考ゝ給さるや行幸ノ
あるうゝとも次乃初ノたり　元　源氏望に天子

の先ゝをゝへあるゝ　宋　源清ノ系也袿と云ゝのゝみて
家ゝ人物々考れ時ぬとのゝも
行幸ノうちゝ給ゝ成へし　元　久ゝのえゝとゝのゝ
とゝ乃ゝ乃ゝ物給ふんある也伊勢ノ久ゝ日ノ中ノ
ゝたうやゝあるゝも袿ノ行幸ノうゝ時ノ中ノのゝ
ゝ給ゝ時ノ袿ノにある系ノうちの袿乃袿也
ゝのゝ給ふに役あるゝや　翠　系ノ物々考ゝ給
とあるゝ行幸ノとゝ
　宋　天子乃袿ゝゝ八日ゝ云ハるゝとのゝ
中にあるひたうやうちゝ袿ハあてに　ハ　久ゝの中に
ひゝ里ゝれゝゝとのゝ袿ハ　翠　細同
　宋　伊勢ノ系也七系ノ石れ給女也寛平ノ袿ノとゝうも
て袿ノあるゝ積てゝまるとゝへり

[illegible]

河船

[illegible]

[illegible]

[illegible]

雲れたのもとをとをてく秋いろはいつれの谷よ新かくしそん
元 仏道の谷ハ霞の谷とをうを流崩法のゆとをあ
ゆや 細 ゆゆゆ紀ゆ あれ谷よ新うくしろんあり蛇人
なれハ放逸のゆゆゆとをひ出ゆゆる也 ゆ 元 流罪れゆ
ゆく 宋 大大弁ゆゆや元 元 原 と月よゆとをへてゆゆる
雲のゆれ栖と八禁中を捨て左遷のゆとをいつれ
ゆ谷とハ仏ゆゆゆゆゆゆゆゆゆれるゆゆ法度ありし
ゆゆゆや又流罪の頃よ相憲の法ゆゆと放逸ゆ法ゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

とせむさいの花ゆゑ月にしたがひてうつろひあらんとにめ
てゝ　花大井うゑめしてゝ　きたるまうをれぬと
愛絵せしゝ人のうつをたるや
をつかうつさうろうをうをうをうをうをうをうをうをうを
可　宋　物の言と八とを来ん舎人は中に来遊よをゝしうと
物言と八ゝてうそれ弱というゝひ物やぬをうけ給ゝそ
古紫来ぬさて行ゆやは汚海元るよ八行くゝ有ゝ但略
ゝ式ふうゝてゝを大ゆ中ゝうゝゝや　細ゆゝうゝゝゝゝ八物
言也　仏とわうゝ中八官人ゝいまゝゝゝゝぬを来やと
物ゝ八法ゆゝよゝゝゝゝ

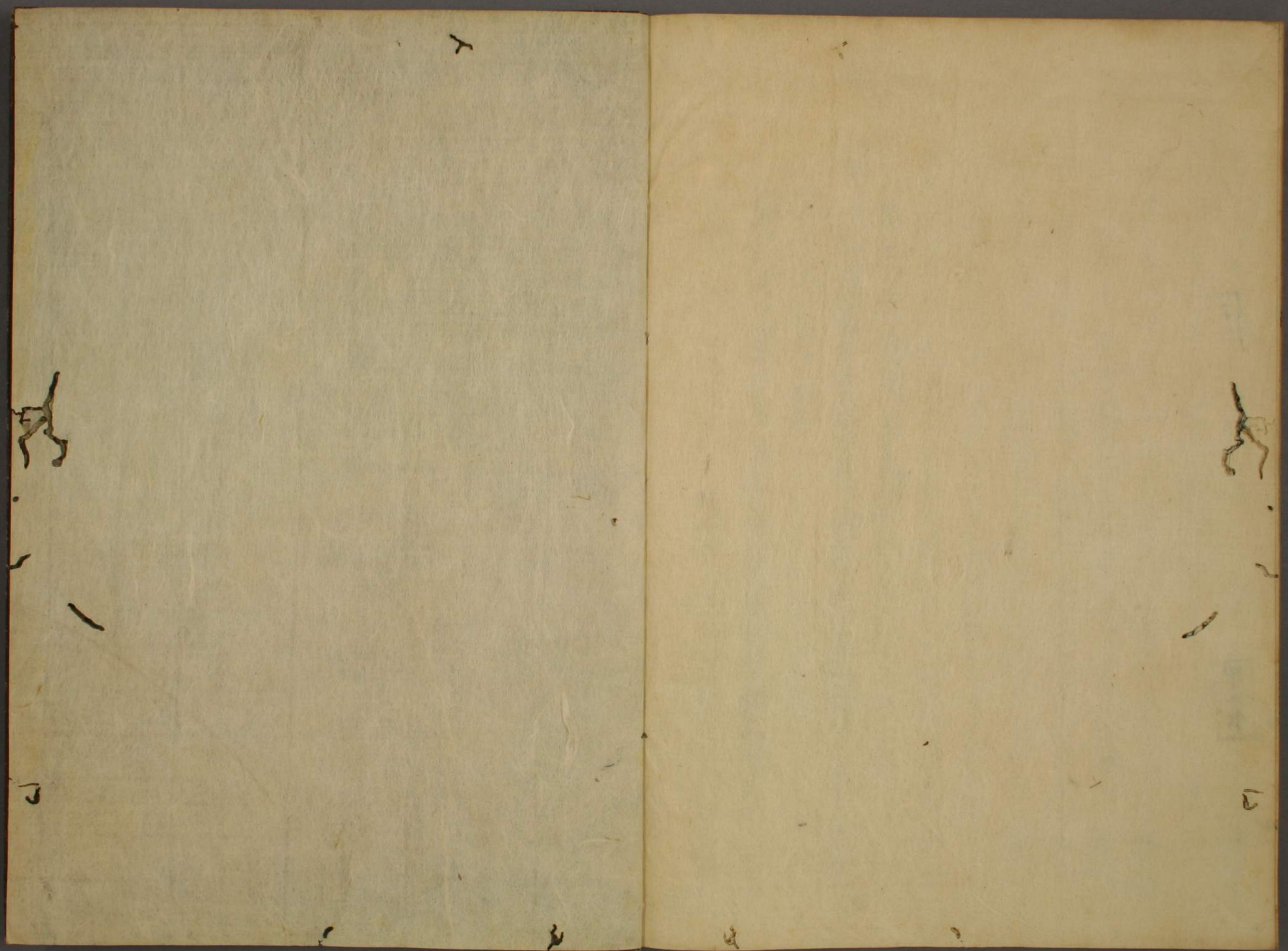
きわさるものと　細　源の翁や同じほどなるものこゝに論をる
るものいわを宗とと明石上ぞそれ乃陽あるとも
そくらゝるにあゝさるや　宗　ゆゑんにハけるこゝろとにてさ
とゝ物語の作のゝ人なゝそ作ゝるをむるるうさや
うゝそなるそ紙なゝゆゝとゝゝゝあるさろきわさとの作
ゝなるゝ
我をとられとなるひるゝ作ゝとゝゝ宗　作ゝられゝ作
はゝにうちゝ人まう作り　作　我ハこゝひあられとゝ作や　紫上
よゆゆさるゝ人なるゝとゝや　細　紫上とゝいさあ作や
宗　紫上をとられとゝひ作ゝとゝや
ひゝさそそめていうゝゝ作ゝそゝうゝゝおゆゆ
細　大井ゝのゝや　宗　内ゝゝゝいうゝさゆゆるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
作やゝうゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とハつきなるべきなれとに所々あるとて所をうそくにうつ
ゐ給ひくはんの中みけいと表り　栄　源氏ハ年に
紙合ぬとの給へ　きるもや
ゐ給ハ光と所をあつめて　とに物とのの
ゐ給ひ　栄　作者と云給源氏の
給ひくあれと　栄　作者と云給源氏の
給ひくハ　栄　紫上乃ぬしとうのあるとと
ぬやうにて　栄　ぬやうにてうつくしさとのんや
せめて　栄　せめてうくし給はまるとそとうつくしれとてうち
ゐ給へるはあいらやうあるを給ましてこれまとあへ
ゐ給へ　栄　ゐ給へ　栄　紫上乃ぬしとうのあるとと

かそい給ハいとなきとてとくん三年になりぬあるそなたに
宗　うそうろハ父母や四人姫君三宗ゑ為ゑ給ハとゑ仰せ
はくこゑ給ハさ海あるとゑひもとてうそうそ　宗　昨ゑ乃
可給さ海とも
いとをもをあけるゑまつうゑさんゑるとゑのと
細　ゑまりうとんうとうとうゑ嘗ゑ乃ゑも　ハ　ゑ嘗
ゑもゑとはうゑハ腸つゑもゑうとれうしひゑゆ
ひ給へとも　ゑ　袴ゑ乃ゑも　宗　ゑさゑ給ん乃ゑ
つゑかゑゑりたゑとゑ嘗ゑをゑうしせてまたゑ
ハうんとも腸乃ゑ給ゑまつうとハうつ
めゑまうしゑゑ　宗　めふゑゑゑうゑううゑも
とゑ給ゑゑゑも
ひきゆひ給へうしゑ宗　宗　ゑ嘗の時うしとひき

ゆい給ゑもゑゑハえ給ハしゑ給ゑもゑゑ給ハゑ給ゑもゑ
とうもにのゑゑとゑゑ給ハんゑゑてとせゑてんし
ゑハうしゑゑゑやとてゑそ　細　ゑゑよの給ゑ給乃ゑ陽ゑ
やうに思ハ給ゑゑとのゑの給給とゑ給給ゑ給給
見給給やうにゑしんゑハしゑゑゑひゑゑしゑゑ
もうんしゑもゑ給給ゑゑゑ給給給

宗 ほんやもゆるんこの婦宗とくれきんるすと俗称へいて
きこせんと笑ひるるん吹へ〜
さるると結るゆいとうく〜 宗 大井の宿へハまるまてくれたるも
ちう聖乃浄堂の会伝ると結出て 宗 十四又同一日ハ閑之
晦日とうる日会て月よ二度たうるとれは笑とそうう
月りみるくひとうりれ浄ちうるとるめう 細 それよ有〜
月ことの十四又日ハ会伝ると月のうすも
年れたるるとみは立まるきりぬへあるを 花 七夕乃笑
みるく立てちうやうるれと行むのあうぬるとに明
石の女えハ也ひ行也 細 星会みはまさるとあるも
宗 七夕乃笑うハ年りー立ひ光ハ月よ二たひるれ、
うきみるくまるまて所るれとも吹へ上れ必うはるる
きうのやハ早下し行へとと会行ちありうる紙

もひあくまし〜をとうんうをふて初おりうら
ぬと会いる吹へ〜
をうひるれもと〜思ふとうるといく初おりう〜ぬ
れ吹へふの初とうるも

四十九終